

生活力を育む家庭科学習

—自分をCHANGE！生活をCHANGE！する子どもの姿をめざして—

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかわって

① 生活力とは

家庭科の学習は、人やもの、環境などのかかわりを大切にしながら、食べることや着ること、住まうこと等を扱う。対象は、身近な家庭生活や家族、学校生活や仲間、自然や社会などであり、子どもたちを取り巻く環境そのものである。

今、子どもたちを取り巻く環境の多様化がすすんでいる。生活者として自立する力や、家族や家庭生活の意義や大切さを理解する力など、自分の生活を豊かでより充実したものにしようとするための基盤となる力や心情を育むことが大切である。これらの力を基にして、「将来にわたってより健康的で快適な生活を創ろうとする力や心情」を「生活力」とした。多様化している社会において、自立して生きるには、「生活力」が不可欠である。将来の自分の姿をイメージし、生活への実践につなげていけるような子どもたちの姿をみとっていけるよう、生活力を育んでいきたい。

② 自分をCHANGE！生活をCHANGE！する子ども

家庭科学習では調理実習や製作実習に加えて、観察や実験等、体験的な活動からの学びを大切にしている。このような体験的な活動を取り入れた学習は、子どもたちにとって魅力的なものであり、積極的に取り組んだり、すすんで工夫を凝らそうとしたりする姿をみることができるとは、一方でその場限りの体験に終わってしまったり、実生活へのつながりが希薄であったりする姿がみられることもあった。児童の生活の基盤は家庭にある。日常的に何気なく繰り返しながら生活していることが、実はなくてはならない、とても大切なことであることに気付かせたい。子どもが自分自身や家族の生活に関心を持ち、“何気なく生活している自分”から“生活する自分”へと意識を近づけていく学びを自己の変容（自分をCHANGE）ととらえていく。そして、将来の自分の姿をイメージしながらよりよい生活にしようとする工夫（生活をCHANGE）する態度を育てていきたい。この2つのCHANGEにつながる学びを“デザインしようとする子どもの姿”だととらえていく。

(2) 家庭科学習でめざす子ども像

家庭生活はだれもが行っていることである。分かりやすく簡単なことのように感じられるだろうし、豊かな時代に生まれ、便利なものがあふれているこの時代では、特に意識しなくても快適な生活を送ることが可能である。家庭科の学習を、家庭生活を見つめ直し、関心を高めながら、家族の一員としての自分、大切な家族の存在に気付く、“大切にしよう、そのために自分ができることは何なのか”を考えていくきっかけとさせたい。そして、家庭科学習での学びを通して、自己の変容を実感し、将来に向けてよりよい生活者となっていく、自分の姿をイメージしながら、主体的に生活の実践につなげようとする子どもの姿をめざしたい。

以上のことから、家庭科学習でめざす子どもの姿を次のように考えた。

◇ 意欲的に取り組み、よりよいものを考える子ども

当たり前になりがちな生活を意識しながら主体的に考え、行動し、工夫を凝ら

していくことができる子ども。

◇ 自己の課題にこだわった実践へとつなげる子ども

子どもたちの家庭生活は個々様々であり、それぞれの課題は異なるものである。自分にふさわしい課題を見つけ、自分自身や自分の家庭に必要だと考えられる課題解決へと、こだわりをもって思考をめぐらし、実践しようとする子ども。

◇ たのしんで生活に活用しようとする子ども

家族や家庭生活を大切に思い、大好きな家族のためによりよく生活に活用していくことをたのしむことができる子ども。家族の一員として生涯にわたって自らの生活にはたらきかけをしていくためには“たのしむ”ことが大切である。

2. 家庭科学習における「学びをデザインする子どもたち」

(1) 子どもたちが学びをデザインする

家庭科学習における「学びをデザインする子どもたち（学ぶ筋道を考えて課題解決に向かう子どもたち）」の姿とは、“必要性を実感し、自分らしく生活に活かそうと工夫するために思考をこらし、実生活につなげようとする子どもたち”の姿であるととらえる。

課題解決	学びの経験を活かして、自分の生活をよりよくするために必要なことを題材の様々な場面において設定する。よりよいものに近づくためにはどうすべきか、何をすべきかを考え、実生活につなげようとする。
対 話	① 対象との対話 → 調べ学習やアンケート調査、実験や観察等を通して対象と関わりながら“必要性”とその意味を実感していく。 ② 他者との対話 → 様々な過程において、ペアやグループ、全体での話し合いを取り入れる。共感したり自分と異なる点を意識したりすることで、よりよいものを探っていく。また、家族やお世話になった人たち、友だちから感謝されたり、ほめられたり、認められたりすることによることも、自己の変容へとつながる大きな要素となる。 ③ 自己との対話 → 自分の生活を見つめ直し、“何気なく生活している自分”から“生活する自分”へと意識化をはかる。今、できること、何をすべきかを自問自答していく中で、自己の課題を設定し、実生活につなげていこうとする。
学び方	必要性を実感したり、自分らしく生活に活かしたりするためには、どのような学び方が適切なのかを選択し、目的に応じて活用しようとする

(2) つなぐ・つむぐ・つくる

「つなぐ」は、子どもどうしや子どもと課題、集団等はもちろんだが、家庭科の学習の中では子どもと家庭生活、子どもと家族をつないでいく。子どもの課題意識を高め、思考を凝らし、実生活へ活かせる学びへとつなげていく。そのための支援として、自分の生活行為を意識できるよう“自分の生活を見つめ直す”という活動を、題材の導入では大切にしていきたい。

「つむぐ」は、対象や他者とかがわっていくことで、よりよい自分に近づくために、今の自分に必要なことは何か、今の自分にできることは何か、等について考えることである。自分と似た価値観や異なる価値観の意見を受けて、焦点化していくことで、“何気なく生活している自分”から“生活する自分”へと意識を変容させていきたい。

そして、意識しながら自分らしく実生活へと活かそうとしていくことが、新しい自分を「つくる」ことになるだろうと考える。

☆学びをデザインする子どもたちの実践例

※1日着用し、汚れが付着したTシャツを実験で確認した後、自分たちの生活と結びつけて身の回りの身につけている物を考えていく場面。ワークシートへの記入後、友だちと相談し合い、意見を出し合った。

なな：私は、ぼうしが気になる。頭から汗をかいているのに、全然洗ったりしていなかったから、やばいと思った。

はる：赤白帽、やばいんとちがうん？“体操服と一緒に洗っているのでは？”という声。

なな：ふだんかぶっている白いぼうしは、全然あらってないから。

C：ほんまや！

T：みんな、洗ってるの？

“洗ってる”“洗ってない”の声。

ここ：頭につけているシュシュとか、あんなの、洗うなんて考えたことなかった。先生、洗ってる？みんなは？

女子：洗ってない。

はる：運動靴も、そんなに洗ってないから、むちゃくちゃ汚れていると思う。

C：え～！普通、洗ってるんとちがうん？

T：以前の上靴のアンケートでは、毎週持って帰る子、10人もいなかったよ。

C：え～！

しゅう：ふとんとかも、そんなに洗ってないけれど、夜に汗かくっていうから。

その後、運動靴、ぬいぐるみ、ゴム、等身の回りで今まで汚れているという意識をもっていなかったものが出された。また、体操服の汚れについても確認し合った。目には見えない、見えにくい汚れ（汗）を確認する実験を取り入れたことで、目に見えている汚れだけでなく、目には見えていない汚れもあることを確認し、自分たちの生活をふりかえることができた。その後の授業で、自分が気になっている身の周りのものを洗濯する実習につなげることができた。

3. 研究の展望

研究テーマと関わって、子どもたちの実態をふまえながら「学びをデザインする子どもたち」の姿をみとっていくための手だてとして、サブテーマ“自分をCHANGE！生活をCHANGE！する子どもの姿”をポイントにしていく。そして、題材，学習活動を設定し，正しい認識力・判断力を育んでいくよう，子どもたちへの日々のはたらきかけを行いたい。

（1）題材設定において

- ① 体験活動や実習を活かし，子どもたちの興味・関心を高められるような工夫
- ② 五感をつかった直接体験を通し，実感を伴った学びを展開
- ③ ペア実習（グループ実習）や一人実習を取り入れ，技能の定着をはかる。
- ④ 根拠のある科学的な見方を大切に，生活への必要性・重要性を高める
- ⑤ 現在社会の中に起きているタイムリーな内容を取り入れる

① “必要性を実感する”ための課題設定

“必要性を実感する”ためには，家庭生活を構成しているものや生活行為・活動にはそれぞれ意味があることに気付くことが必要である。生活体験への意識が少ない児童には，

何が問題なのかを捉えることが難しいだろうと予想される。生活上の問題を問題として捉え、課題として意識させるには、生活への関心をもたせなければならない。自分自身の周りや生活場面を振り返らせて観察させ、仲間との意見交換を通じて問題であることを再認識させたり、いろいろな方法があることに気付かせたりすることが必要である。

生活上の問題は児童の手に負えないものもあるので、発達段階を考慮して、解決の見通しがもてるような課題にして学習させるようにしたいと考える。時として、課題設定の主体は教師、児童の両者でと様々なケースが考えられるが、学習のねらいと考えるのを外れにならないよう、教科の特性上、教師の役割の大切さも意識していきたいと考える。

生活上の問題を問題として捉え、全体課題“テーマ”として捉えることができるような内容のものを、教師の支援を最大限に活用しながら設定し、解決へと思考をこらしていきたい。

② “自分らしく生活に活かそうと工夫する”ための題材設定

現在の児童の忙しい生活を考えると、すべてが実践できるとは限らない現状にある。しかし、生活の基盤となる生活を主体的に営めるよう意識していくことは必要で、小学校時代はその基礎を培う時期である。

生活は生きていくものであるから、その生活に主体的に向かっていく行動力がなければならない。子どもたち個々の生活に応じた実践や活用を考えて行動できるようにしていきたい。そのためにも、学習で扱う教材を吟味し、児童の生活実態からかけはなれないよう実態把握のための事前アンケート等、心がけながら、題材終末の振り返り活動、今後の生活への個々の課題の設定を大切に、取り組んでいきたい。その際、自分だけでなく相手意識をもって考えたり実践したりできるよう、支援していきたい。

（２）日常生活の中での取り組み

保護者の協力も得ながら、家族の一員としての自分に、意識を持たせるため、自分たちができることとして、「お弁当箱洗い」「テーブルクロスやマスクの洗濯」等を取りあげ、実践していきたい。他にも週末や長期休み中を利用し、必ず何かにチャレンジする機会を作っていきたい。やってみて初めてわかることや再認識できることも多く、子どもの意識の変容や家庭生活を見つめ直すよい機会になるだろうと考えている。

3. 研究の評価

体験的活動の内容により、グループでの活動、ペアでの活動を取り入れ、自己評価だけでなく相互評価を取り入れていく。互いに見合うことにより、自分のことだけでなく、仲間のことも含め、今まで気付かなかったことに気付いたり、活動への意識や意欲が高まったりすると思われるからである。また、題材の終わりには自己の活動振り返りシートを活用していく。教師が子どもの実態を把握していくと共に、子ども自身が自分の変容や成長を実感し、自分の生活への実践につなげていくためのきっかけとしていきたい。

参考文献 内野紀子・藤原孝子 編著『新学習指導要領の展開 家庭科編』
明治図書（2009）
筒井恭子 編著『小学校家庭科の授業づくりと評価』明治図書（2012）